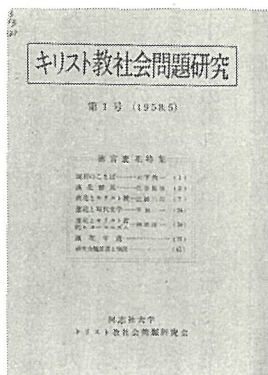


『キリスト教社会問題研究』



いまから二十年前に同志社の教職員の有志の間で「近代日本の社会思想及び社会運動に及ぼしたキリスト教、とりわけ、とりわけプ

ロテスタントの影響を明らかにし、これに関する資料を蒐集、整理、研究する」ことを目的として「キリスト教社会問題研究会」略称C・S研究会の結成が話し合われた。一九五六年の一月のことであった。まだ暖房も不自由なころで、オーバーを着たままで小さなストーブを囲んで研究会結成の手筈を相談したことを懐かしく想起する。場所は、現在の図書館の北で、そこに木造の平屋があり、人文科学研究所として用いられていた建物の一室であった。

研究会が正式に結成されたのは、一九五六年の二月一日である。はじめの参加者は一五名。そのうちわけは、神学部二名、法学部三名、文学部七名、経済学部二名、人文科学研究所一名であった。研究会は、住谷悦治氏を代表者として、文部省に科学研究費交付金の機関研究の申請を行うと同時に、大学当局に一〇万円の研究費の申請をなした。当初は自発的な研究グループで、大学から二〇万円を借りうけて資料の蒐集をはじめている。どうしてもこの研究をやらなければならぬという同志社の熱意のほどがうかがわれる。

幸い一九五六年に文部省から機関研究の助成金三〇〇万円を得ることができた。この種のものとしては、同志社大学にとってははじめてのことであった。これには、代表者の住谷悦治氏の尽力が少なくなかった。さらにこの研究の重要性を認めて、ハーバード大学のエンチン・インスティテュートが本研究を支援するようになった。それは、昭和三十四年七月から四十九年六月まで通算一五年にわたってなされ、総額四、四四四万円に及んだ。昭和三年の秋、わたしはたまたまアメリカカン・ボードの講師としてボストンにおり、ハーバード・エンチン・インスティテュートにライシャワー教授とあい、同志社において始めら

れているC・S研究についてのべ、同教授の理解を求めた。昭和三三年ライシャワー教授がハーバード・エンチン・インスティテュートの所長となり、大下角一学長は渡米の途次ハーバードを訪ね、同志社でなされているキリスト教社会問題研究についての研究助成についてライシャワー所長と打ち合わせをなし、翌三四年七月から前記の研究助成がなされるに至った。

はじめの数年は、資料の蒐集に力が注がれたが、研究成果の発表機関誌として、『キリスト教社会問題研究』が発行されるに至った。昭和三三年五月に第一号が出されている。別に『創刊号』というのが、同じ内容で同年四月に出ているが、これは何かの手違いで先に出たもので、正式には五月に出た第一号を挙げるべきと思う。内容は、『徳富蘆花特集』である。前年秋、蘆花没後三〇年を記念して講演会が開かれ、それを土台として本号が編集されている。第二号は、昭和三三年三月に亡くなった山川均を記念して特集が組まれ、第三号には、『明治前半期のキリスト教と社会』についての特集となっている。

一九五九年四月より、『キリスト教社会問

題研究会』は、同志社大学人文科学研究所に正式に組み込まれるようになり、今日では同研究所の一研究部門として共同研究をなし、その研究業績を『キリスト教社会問題研究』誌上に発表し、二四号（一九七六年三月）に及んでいる。

近代日本におけるキリスト教と社会というきわめて広い研究領域にあって、本誌にあらわれた論文のテーマも多岐にわたっている。しかし、研究会は、主に三年を周期に、いくつかの共同のテーマを設けて研究を推進したので、本誌の論文のテーマには、自らいくつかの焦点がある。その主なものを挙げると、『熊本バンドの研究』、『戦時下抵抗の研究』、『民友社の研究』、『山本宣治研究』、『松本平におけるキリスト教の研究』、『組合教会研究』、『海老名弾正とその周辺の研究』、『留岡幸助研究』などがある。それらの研究成果の多くは、書物としてまとめられて刊行されており、目下出版準備中のものもある。

一九六三年住谷悦治氏が総長になってから研究会の代表者に篠田一人氏になった。篠田氏はC・S研究会創立以来世話人としてなみなみならぬ情熱と忍耐とをもって本研究の推

進のために尽力された。一九七〇年同教授の定年退任に伴って、私が代表者となり、今日に及んでいる。編集にはC・S研究会の運営委員が当たり、杉井六郎氏が煩雑な編集の用務に当たって下さっている。第二〇号（一九七二年三月）以来、小沢三郎氏の蒐集による『日本プロテスタント史料』が引き続いて収録されており、これは同氏の永年の研究のたまものとして貴重な資料を提供している。

こうしてみると、本誌は、キリスト教を徳育の基本とする私学同志社にとって、きわめて特色のある研究誌である。共同研究に参加している者は、今日四〇名に及んでおり、単に同志社大学の教員に限らず、同志社学園の教職員が参加している。創設いらい二〇年の歴史の中で、いつも本研究を支えてきたものは、同志社に最もふさわしいこの研究を、一緒に推進しようという同志的な結合であり、それを制度化して継続した研究を可能ならしめた同志社大学人文科学研究所の働きであると思う。

（大学神学部教授・竹中正夫）